

ウィリアム・ガウランド(William Gowland)について

メモ)鉄本 2022.07.22

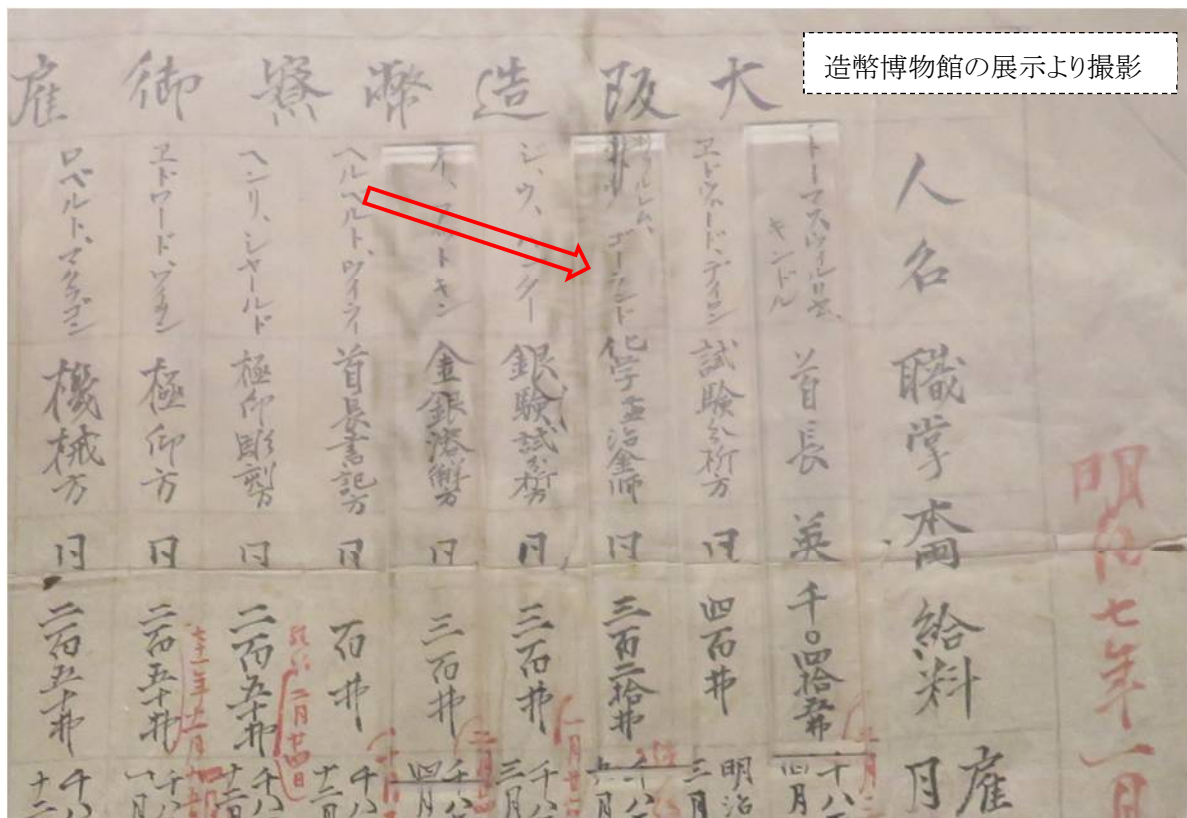
明治期の仁徳天皇陵古墳の写真パネルが展示されています。これを撮ったガウランド(ゴウランド)は、「日本考古学の父」と言われています。その人物像についてまとめました。

1. 出自

- ① 出身地; イギリス・サンダーランド(イングランド北部の北海に面した港湾都市)
- ② 誕生・没年; 1842年~1922年
- ③ 経歴; 王立化学専門学校・鉱山学校で、化学や冶金学を学ぶ。
1870年~72年 ブロートン製銅会社で化学・冶金技術者としてキャリアを積む。
- ④ 明治政府からの招聘; 明治5年(1872) 30才の時に大阪造幣寮(現造幣局)の化学兼冶金技師として着任。お雇い外国人は通常3年契約であったが、16年間もの間、在職した。

2. 造幣寮での業績と処遇

- ① 業績; 反射炉の築造、溶銅技術を伝える。造幣局長官顧問、溶解所長等を勤める。陸軍大阪製造所(大阪砲兵工廠の前身)で特別顧問を勤め技術指導を行う。1888年の帰国年には、勲三等旭日小授章が贈られ、同時に3000円(現在価値で約6千万円)の褒賞金も贈与された。
- ② 処遇; 明治7年(1874)では、御雇外国人ナンバー3の立場で、月給は現在価値で640万円~800万円であった。首長のキンドル、ナンバー2のディロンが帰国後は、実質ナンバー1として大きな功績を残した。



造幣博物館の展示より撮影

3. 私的活動と交友関係

- ① 私的活動; 独身で高給取りであったので、趣味にお金を費やした。
・円山四条派の絵画を蒐集

- ・登山家としての活動；六甲山で近代登山の紹介、信州山岳地帯を日本紹介ガイドブックに「日本アルプス」として紹介。「日本アルプス」の命名者。

② 日本研究者との交友関係

- ・W.G.アストン 25年間日本と朝鮮に滞在。「日本書紀」を翻訳。ガウランドと共に遺跡調査。
- ・バジル・チェンバレン 「古事記」を完訳。淡路島(オノコロ島)、淳仁天皇陵の調査
- ・アーネスト・サトウ ガウランドとの往復書簡「躍る少女の埴輪」

4. 古墳研究活動

全国406基の横穴式石室(「岩穴墓」と表現)を調査し構造分析、140例の略測図を作成した。ガウランドの科学的・実証的な調査・研究は、当時の日本の学問水準をはるかに超えており、「日本考古学の父」と呼ばれている。古墳研究の方向性は、「古事記」の初期豪族・天皇家の祖先陵に興味を持ち、日本の古墳と英国の墳墓(ベル・マウンド)の構造の類似性に注目するものであった。明治17年(1884)には、朝鮮に渡り日本・中国・朝鮮の三国関係を研究した。研究態度は「現地調査主義」をとり、実地データを次のように整理した。

- ① 「日本のドルメンの寸法」一覧表；玄室と羨道に分け、寸法、方向、形状を示す。
- ② 墳丘の区分；「単円墳」、「段丘付円墳」、「双墳」、「二段丘と周濠付」に分類。
- ③ 観察事項；側壁、天井石の状態・枚数、「アレ・クベルト(無袖式)」の類型化

<大型前方後円墳の測量>

- ① コナベ古墳、見瀬丸山古墳(100分の1縮尺の図面作成)
- ② 芝山古墳(東大阪市)の測量；石室床面を方眼状に区画、20区画を設け、副葬品の配置状況を克明に記録。木棺の配置、1108個の玉(青色・緑色ガラス丸玉など)の分布、出土位置を記録。
*仁徳陵、履中陵、応神陵などは宮内庁管理で立ち入り調査せず写真撮影のみ。
写真資料は全部で190件(古墳だけではなく、猿石なども含まれている。)

<地方の古墳観察>

大念寺古墳(出雲市)、前二子古墳(前橋市)、お富士山古墳(伊勢崎市)、築山古墳(出雲市)など
⇒ 前方後円墳が中央と地方との政治的支配関係を反映していることに言及。

5. 帰国後の活動と成果

- ① 論文発表 1892年「日本の写生派美術」 1897年「日本のドルメンと埋葬墳」
1899年「日本のドルメンとその築造者たち」 1907年「日本の初期天皇陵とドルメン」
1915年「古代日本の金属と金属工芸」
- ② ガウランド・コレクション 古墳出土品、祭祀具、土師器、須恵器、馬具、武具など
 - ・芝山古墳(東大阪市)；三輪玉10個、ガラス製丸玉361個、馬具金具、耳環、馬具雲珠、杏葉、鉄鏃、須恵器台、高杯など
 - ・鹿谷古墳群(亀岡市)；子持脚付有蓋壺、馬具、くつわ、杏葉
 - ・天皇陵古墳；高杯(前の山古墳)、円筒埴輪(岡ミサンザイ古墳)、平瓶(安康天皇陵)、土師器(天智陵)、埴輪片(応神陵)、大型甕破片(仁徳陵？型式が整合しない)、須恵器片(コナベ古墳)、陶棺(太鼓塚古墳 豊中)

【参考文献】・「ガウランド 日本考古学の父」ヴィクター・ハリス/後藤和雄編 朝日新聞社 2003
・Wikipedia 造幣博物館展示品